

## <韓国音楽 2>

マスゲーム、巫覡、王山岳、コムンゴ、百濟琴、加耶琴、三弦三竹、燃燈會、八關會、唐樂、雅樂、郷樂、大樂管絃房

### 7. 韓国 音楽の 歴史

われわれの音楽の歴史を紹介することはやさしい問題ではない。5000年の歴史の中で培われてきた長く複雑な音楽の歴史のためである。そして、それと同じように歴史的問題の理解は初心者にはとても難しい。しかしわれわれが学ぶ藝術的で學問的な世界はすべてが過去を基礎にして成り立ったものであって、また過去でないものをわれわれは扱うことができないものの、一度とりあげてみようと思う。また音楽の歴史の理解の伴わない音楽の實際の理解は難しいものでもあるので、ここでは 音楽的な概要だけを紹介する。

#### か) 三國時代以前の韓国音楽(?-A. D 頃)

三國時代以前のわれわれの音楽に対する記録は中國の歴史書に豊富に残されている。このような記録によれば古代の韓國人たちは春と秋に空にお祭りを行って、このお祭りには必ず音楽が使用されたと言う。大體この時の音楽は総合的な演出の形態で音楽と踊りなどが入りまじった massgame 形態と似た形であると言う。この時の音楽を主宰した人は巫覡として知られていて、この巫覡による音楽であったので韓国音楽の起源は巫に求めなければならないと言う意見が提示されている。この時の音楽については詳しく分からないが韓半島南方には中國とはちがうわれわれの固有の弦楽器があったと言う記録がある。

#### な) 三國時代(A. D 前後 -7 世紀 末)

三國時代音楽の實際は不明であるが、中國とわが國の昔の文獻の記録によって、ある程度音楽的な姿はうかがい知ることができる。

#### 高句麗(B. C. 37-A. D. 688) :

高句麗には**王山岳**(ワンサンアク)と言う音楽家があった。彼は高句麗の首相に近い官職を持った者として中國樂の7弦琴を模倣して**거문고**(コムンゴ 琴)と呼ばれる弦楽器を作って、自ら100余曲の琴音楽を作曲して演奏したと言う。彼の演奏腕前はとても優れたものであったから空からくろい鶴が飛んできて音楽音に合わせて踊りを踊ったりした。だからコムンゴは漢字で‘弦鶴琴’と名づけられ、これが‘弦鶴琴’となってこの言葉は今でも使用されている。‘弦琴’はこの弦琴のハングル式表記方法である。漢字は琴、すなわち弦琴と言う意味をした空があたえた弦楽器と言う意味を持ったもので把握している。この楽器は今も使用されていて、以前古墳壁畫に現れた琴の姿は現在とほとんど同じである。

コムンコという土俗的な楽器を持った高句麗の音楽は中國の隨(581-618)と唐(618-907)の音楽に相當な影響をあたえた。だから隨と唐では高句麗の音楽を御前の公式的な音楽の一つと認めたりした。これは百濟と新羅の音楽が隨と唐から公式的に認められなかった事実と比較される。また高句麗は中國と西域から絶え間なく音楽を輸入して音楽文化を豊かなものにしていった。高句麗人たちはこれらから音楽はもちろん楽器までも輸入して、このような事実は當時の記録にのこされている。このように地理的な問題で大陸の北方から輸入された高句麗の音楽文化は三國のうち最も優れたものとして現在評價され、高句麗の音楽は當時の日本音楽の形成にも相當な影響をあたえた。

#### 百濟(B. C. 18-A. D. 688) :

百濟の音楽についての記録は多くない。また高句麗の音楽姿は壁畫にも少なくとも現れているが百濟音楽はそうでもない。しかし百濟にもある程度發達した音楽文化があったと思われる。中國南部の音楽を受け入れた百濟の音楽は高句麗の音楽が男性的であるのに比べて、女性的であって柔らかい音楽であったと知られている。これは記録にある楽器を見てもそうで、中國南部の文化的な性格から見てもそうだとはいえる。中國に百濟の音楽が紹介されたりしたが公式的な音楽と認められてはしなかった。

しかしやはり百濟も日本音楽に少なくない影響をあたえて、中國から受け入れた器樂であると言う仮面劇(マスクプレー)とこれに伴われた音楽を日本に傳えた。そして高句麗のコムンゴを日本に傳えた。日本ではこれを百濟琴と呼んでいる。この器樂の形態は現在わが國の仮面舞踏でその姿を探しうるが、日本には記録とこれによる仮面のような遺物だけが残っている。もともと器樂は佛教の布教を目的でしたものであったが、現在の仮面舞踏はその性格が多少變質した。

一方、高句麗と百濟の音楽では上に言及したものの以外にたくさんの歌があったものと考えられている。この中の一部はその歌詞が今もって傳えられている。

#### 新羅(B. C. 57-A. D. 936) :

統一以前の新羅は文化的に高句麗と百濟よりすぐれたものと知られている。そして統一以前の音楽についての記録も多くない。しかし6世紀中葉に加耶(?-562)からカヤグム(加耶琴)を受け入れた後の音楽文化は相當だったと思われる。加耶が滅びると加耶人である于勒(6世紀頃)は加耶琴を持って新羅に亡命して、當時の王である眞興王(534-576)は音楽を愛して彼を厚遇した。そして貴族の子弟3人を于勒に送って踊ることと歌と音楽を習わせた。

于勒はカヤグムの演奏の外に作曲にも優れていた。當時の地方民謡を基礎にして自由奔放な表現をしたという12曲の音楽を作曲した。しかしこの12曲の音楽は弟子3人によって簡潔で表現が

抑制された5曲に減った。このような事実に先生であるウルックは初めには憤慨したが、静かな5曲はウルックを感動させたと言う。後にこの5曲は新羅の御前音楽となって、音楽的な特性はApollon的であったことで推測されている。しかし不幸にもこの12曲と5曲はその曲名だけ伝えるだけで音楽はのこっていない。

于勒は音楽に天才であったが、カヤグムはガヤのイムギムはガシルワン(嘉悉王6世紀?)この中国のゼンと言う弦楽器を見て作ったと言う。しかし現代の多くの学者はゼンを模倣したのではなく、先にのべた朝鮮半島南部の固有弦楽器でカヤグムの由来を探している。

新羅人は、カヤグム音楽をとっても楽しみ、また日本に新羅の音楽と共にカヤグムを伝えもした。このように伝えられたカヤグムは日本人によって新羅琴といわれてきた。そして日本に傳わるこの韓国の古代カヤグムや新羅遺物に見えるカヤグムの姿は現在正樂で使用されていることと差がない。

三國を統一した新羅は高句麗と百濟の文化を受容し、中国の唐の文化を受容して、より発展した政治體制と文化を持った。音楽もそのようであった。三竹と呼ばれる大琴, 中琴, 小琴の楽器と, 3弦という琴、カヤグム、香枇杷の音楽を楽しんだ。この三弦三竹はすべてわれわれの固有な楽器である。大琴は西洋音楽のFlute、小琴はPiccoloと比較されることができ、中琴はこのうちの中間の大きさの管楽器である。香枇杷はKitharaと似た姿の弦楽器である。この6種の楽器中香枇杷だけ除外すればすべてが今も使用されている楽器である。

新羅人たちはまたこの6種の楽器に適当な基本的な調理論を持ち、この理論による数百曲の音楽があったと言うが、その音楽は伝わっていない。そしてこのほかにも唐の音楽と佛教音楽である梵唄を楽しんで、郷歌という歌を楽しんだ。

一方新羅人たちは琴音楽を特別に楽しみ、また大切に考えた。王までも琴音楽の教育と普及に少なくない関心を持ったと言う記録はこれを証明してくれている。このようなわけに琴音楽は、教養がある新羅人が楽しんだものであって、この伝統は朝鮮時代までも續いた。

新羅の音楽的な事件の中で、一番特記するに値する事実は、音聲署と呼ばれる國家的音楽機關の設立である。國家の公式、非公式的であるほとんどすべての音楽行事を管掌した音聲署は7世紀中盤以前に設立された以来新羅滅亡まで存続した。以後この伝統は高麗と朝鮮に續いて現在は國立音樂院に繼承されている。

新羅や高句麗、百濟の音楽的な特性の一つはさらに彼らは音楽を器樂、歌、踊りの綜合された概念から眺めた事實である。彼らは音楽を獨立した個別的な芸術として眺めることを拒否したものの、このような傾向は國立音樂院によってある程度は繼承されている。國立音樂院では現在音楽だけではなくて舞踊まで管掌している。

高麗(918-1398) :

高麗の初期音楽は新羅の音楽をそのまま受け入れたという事実以外には知られている事が特にない。ただ、釋尊の生誕を祝う燃燈會と巫俗的な八關會の行事に綜合藝術の形態として音楽を使用した記録があるだけである。この2つの行事は多大な經濟的負擔のために一時的に中斷されもしたが高麗末まで續けられ、この中には多くの新羅音楽の痕迹が窺える。

こういった中期以後は初期とは事なり、以後ははっきりと高麗音楽の特色が現れはじめた。1114年と1116年の2回にわたる中國宋との音楽交流からは宋の神樂の中の一つである司樂と呼ばれる唐樂と、宋の宮中祭祀音楽が雅樂という名で輸入された。以後、雅樂、唐樂、郷樂の區別が明確になり、この分類による區別は朝鮮末期まで受け繼がれた。

高麗人たちも舞尺や音楽と舞踊を楽しんだ。それも我々の音楽と舞踊、中國音楽と舞踊を選ばず楽しんだ。そして數多くの郷樂と唐樂が獨立的に、或いは舞踊とともに宮中で演奏された。『高麗史』に見られる32曲の郷樂と43曲の唐樂は、こうした事實をよく物語っている。この中の郷樂は少なくない數が樂譜として現在まで傳えられているが、唐樂はただ「ポホジャ(步虛子)」と「ナギャンチュン(洛陽春)」の2曲だけ傳えられ演奏されている。しかし、それでも韓國音楽化がされたため、中國式唐樂のニュアンスを探すのは難しい。他國の文化を受け入れ我々の文化にするといった力は我々の文化の特徴の中の一つであろう。

高麗の音乐的な事件の中、1116年の大成雅樂の輸入はかなり劃期的なことであった。當時、輸入された雅樂はたとえ不完全であったが、以後我々の音楽に雅樂の基礎を提供する根據となった。そしてこの時までの唐樂と郷樂に雅樂を追加することで、音楽文化の擴大をもたらした。これ以外に高麗には外國音楽の痕迹が相當見られる。

一方、高麗音楽は中國宋から雅樂と唐樂を輸入したため、多くの雅樂器と唐樂器を確保できた。そして、それらは管絃樂の伴奏に合わせ歌を楽しんだり、この音楽は朝鮮の聲樂に多くの影響を与えた。この音楽の歌詞はその大部分が男女間の愛を歌っているものであった。

高麗人たちは新羅と同様に國家的音楽の機關を設けた。大樂署、管絃房、あるいは大樂管絃房と呼ばれるこれらの音楽機關は、10世紀末葉に設立され、高麗が滅するまで名前が變わったが、存續しながら活潑に音楽活動を展開していた。これらの音楽機關の官吏たちは貴族だったが、實際の音楽人たちは賤民であり、大體が世襲的にその仕事を受け繼いだ。この點は新羅の音楽人たちのほとんどが教養のある比較的高い身分の者だったのと對照されている。

1. 韓国音楽の起源は何ですか？
2. 三国時代の音楽に共通したのは何ですか？
3. 三国時代の代表的な楽器にはどんなものがありますか？
4. 高麗と宋の交流が韓国音楽にもたらした重大な変化は何ですか？

この時間では韓国音楽2について学習をしました。

次の時間では韓国音楽3について学習をします。

お疲れさまでした。